

教育学的思惟に関する考察(続)

—ドイツ教育科学の立場から—

大 谷 光 長

はじめに

この論文は、前年度発表した「教育学的思惟に関する考察」の続編である。先き立つ論文の中で、多少の危険を冒して、教育学的思惟に関する二つの論理を取りあげた。一つは、ディルタイ及びリットの各論文に見られる「存在—当為の論理」であり、教育を人間行為の規範乃至理論として見る立場である。勿論既に明示した如く、ディルタイとリットとの論旨は、同じく「存在—当為の論理」に基づくものであるが、然し両者の見解の間には歴然と相異が存する。然し、両者とも、「当為への見透しの中で存在を、存在への顧慮の中で当為を把握する」という点では一致していると考えられる。成程、この事自体理念としては確かに正しい。が然し、この論理は、教育作用の微妙な関連を説き明すには、なお余りにも普遍的であり、現実性を欠くこと大といわねばならない。さて、その二は、教育を人間の生成理論として見る立場であり、グアルディニの論文で明らかにされた「弁証法の論

理」である。既に明らかにした如く、グアルディニは、具体的生命の全体的形成を保証する意味において、各要素の弁証法的關係を明らかにした。成程、彼のいう「自我の中へ中心づけられた教育学」と「対象の教育学」とは、夫々弁証法的反として存立し、この二要素は相補的対立的に教育学的範疇の構造を規定する。が然し、その説く弁証法的關係は、依然として形式的、理論的たる印象を免れず、筆者は進んで更に、その「相関的弁証法」への移行の必然性を暗示してきた。従って、今ここに纏めあげた論文は、相関的弁証法の論理に基づく教育学的思惟に関する、微力なる筆者の苦案の一試論に過ぎない。識者の御批判及び御指導を乞うこと切である。

現代の教育学及びその対象規定の問題性に注目する時、我々は現実の問題を、教育学の対象理論の中心的発端として認識せざるを得ない。何故か。教育への問題は、常に又必然的に、人間への、そして人間の本質規定への問題に留まり、且究極的には、現実の、現実へ

の本質規定の、並びに人間的現実の存在規定の問題へと還帰せざるを得ないからである。

さて、ドウレックスラーは (Julius Drechsler) その著「教育科学における現実問題」(Das Wirklichkeitsproblem in der Erziehungswissenschaft, 1959) の中で、このことに関して以下の如く主張する。即ち「現実に対する人間の関係は、一義的な並列性或は前面的対立性の関係 das Verhältnis einer eindutigen Zugeordnetheit oder frontalen Gegenübergestelltheit ではなくて、不断に相関的に条件づけられている緊張弁証法の関係 das einer stetigen korrelativ bedingten Spannungs-dialektik である」と。① 思うに、この関係から、人間の、及びその世界そして現実における本来的位置の活動の問題、及び問題性が生ずるのであろう。そして、ここにあつては、人間は何といつても中心存在 das Wesen der Mitte であり、而も常に新しく再び構成されねばならず、且又一切の教育及び陶冶の緊張法則を、自己の中に運載している、そういう中心存在であらう。

かかる主張は、我々に以下の二点を明らかにする。即ち、一つは、人間は最早や純粹に心理学的思考様式における如く、ある分離され、且孤立された、つまり孤立的対象として、省察されるものではないといふこと、及び他の一つは、現実も亦現代の哲学的人間学的思维が暴露し、そして科学的に理解せしめた如く、純粹な因果法則性及び純粹な空間及び時間関係の意味において現象するものではないといふことである。所詮、人間は一定の現実問題との溶解し難き纏絡の中に *in der unloslichen Verflochtenheit mit dem Wirklichkeitsproblem*

認識されることを必要とする。「人間は今やただ、彼自身の作品ではなく、彼自身の中に憩うのでもなく、彼自身によって規定され、而も溶解し難く规定的に、又再度人間へ還り作用する、そういう一切の人間の現実の中心である」とドウレックスラーはいう。人間存在としての人間は、現実問題なくしては、及び人間と現実との連合性なくしては、最早や理解されるべくもなく、今や然し、人間と現実との交通の中に、教育学的問題それ自体の中心が始まるのである。これを以つて、教育学の対象は、ただただ人間自体の中で、尚又現実問題の中心だけ探究されるべきではなく、人間と現実、人間と世界との不分離な相関関係、及び相互的關係の中で探究されなければならない。然らば、そういう人間规定的現実分析から生ずる、根源的教育学的認識と結果は如何なるものであるのか。

思うに、科学として理解される現代の教育学は、二つの決定的局面 *zwei entscheidende Phasen* を有する。即ち、第一次大戦以後の時代において、なかでもドイツにあつては、一九三三年迄に、教育学的問題指定の広がり、ただに個別的的文化国家の限界を超えて生じたばかりでなく、例えば包括的比較教育学の創造が *die Schaffung einer umfassenden Vergleichenden Erziehungswissenschaft* それであるが、同時に又文化教育科学における教育学的問題の、歴史的且組織的視点への深まりが進められていた。而して、やがて第二次大戦の終結を通して、今や教育学的問題は、國際的世界状況の背景から、その中へ人間としての人間が入り措定されている現代的時代境位によって、明らかにされるように思われる。② かくて、教育学的問題は、諸民

族及び諸国家の問題から、人類問題へ von einer Frage der Völker und Nationen zu einer Menschheitsfrage 即ち、世界及び現実一般における人間の、そして人間の現存在の問題へ拡張されていった。その勢の赴く所、現代の社会問題、労働問題、並びに政治的問題は、新しい且それ故に今迄にそこに存在しなかった様式の中に、教育の諸問題を設定したのである。ドウレックスラーの見解によれば、第二次大戦以後の局面において、ドイツ教育科学がその上に措定され、且そこからドイツ教育科学の新しい課題に着手し得た基盤は、二十年末以来新しい実存哲学的傾向との結合において、その陣痛の苦しみをなめ、而も更に三十三年以後には、一時中断され且疑惑の中におかれた「人間的、思惟」 das anthropologische Denken であるといふ。^④

然らば、この人間的思惟における中心的発端点は何か。哲学的、教育科学的、人間的、並びに社会学的思惟が接触する中心的発端点は何処に横たわるのか。思うに、教育科学及び現代的意味における教育哲学が、その前に逃がれ難く措定されている現実の概念が der Begriff der Wirklichkeit それではなからうか。而して、この現実概念において、人間への問題、及び人間的なるものの本質への問題が、常に新らしく点火され、且この概念から常に新らしく規定されるに違いない。周知の如く、現実概念は即自的に、ただに教育学的現実の領域を包圍するだけでなく、同時に或は政治的、或は技術的、或は経済的、或は宗教的、或は科学的現実の側面から考察され得る。然し、一切の現実概念において、而も同時に、人間的なるもの、及び人類的なるもの概念が顕著であり、且それ故に現実概念が、人間の、及び人

間的なるものの本質への問題一般に対し、構成的であると断ずるは、果して妥当たり得ないであろうか。

さて、教育学的観点における現実とは、究極的複雑な交錯と制約の中に in letzter komplexer Verflochtenheit und Verschränktheit その姿を示す。より詳しくいえば、教育学的視点に基づく現実概念においては、人間は、その生成上からしてただただ弁証法的なるものによって、把握可能な根本性格を提示する如く、それと同じ程度に又、人間は相關的規定的根本構造が eine korrelativ bestimmte Grundstruktur 人間としての人間の、ある究極的に取消し難き相関性の関連法則のうち拘束されていることの中に姿を現す。思うに、この弁証法的実行の根本性格と相關的規定的根本構造こそ dialektisch ausgerichteter Grundcharakter und korrelativ bestimmte Grundstruktur 教育学的視点に基づく現実の中に措定されている人間の、適応する現実の本質を示すものといつてよい。

1

現実とは、前以つて発見されたもの、我々にとつて、ある本質的に抵抗するもの、及び包括するものとして理解できる。

現代哲学の思惟にあつては、人間は二重点と次元の中で、現実と直面するという。先ず「現実とは抵抗及び抵抗性の性格を伴つて、現代的人間に対し、その生長している割合において出合ふ。 Wirklichkeit

begegnet dem modernen Menschen in wachsendem Masse zunächst mit dem Charakter des Widerstandes und der Widerständigkeit。」更に、「常に新らしく離れて行くもの、及び常に新らしく我々の所有に帰するもの、並びに我々を圧迫するものとしての現実に対して、ある他の現実概念が——この概念は抵抗及び離れて行くものとしての現実概念によつて、正しく要求されるものであるが——即ち我々を圍繞するもの、我々をそれ自身の中に包むもの、及び運載するもの、並びにそれ自身によつて条件づけられるものとしての現実概念が der Begriff der Wirklichkeit als eines uns Ungreifenden, uns in sich Beschliessenden und Tragenden und durch sich Bedingenden 相對峙する。」^⑥この両現実概念は、一見するに究極的な矛盾の中に相並んで存立するように思われる。そして、何といつても、若し人間がその実存において、一般に擁護しようと思志し、且自己自身と一致しようと思志する時、人間の実存は余儀なくこの兩者を明らかに際立たせる。而して、教育学的領域にあっては、世界及び現実の中へ我々が入り措定されることのうちに in unserem Hineingestelltsein in Welt und Wirklichkeit 深い意味が横たわっている。これが、教育現実 eine Erziehungswirklichkeit と呼ばれるべきものである。ペーターゼンが (Peter Petersen) その著「教育学の源泉」(Der Ursprung der Pädagogik, Berlin, 1931) の中で、教育現実の概念を提示し、一切の教育学的生起がこの教育現実の中に埋没されており、且この教育現実からのみ、教育科学がその包括的問題措定を獲得することの可能であると主張する所以もここにある。^⑦実際、教育現実にあっては、我々に常に新ら

しく対立するもの、及びそれと共に抵抗するものとしての現実と、我々を包括するものとしての現実とを全く引き離すことは、不可能であると考えられる。ここを以つて、人間は現実事態の中心へ收容され、そして、ただこの相互的關係からのみ、人間は彼の固有な、彼にとつて本来的な世界を建設することが可能であるばかりではなく、尚又、この世界の中で自己を擁護することが可能であり、且自己を保護することが可能である。然しながら、教育学的発端にとつて、人間の、世界及び現実の中での単なる存立が das bloße Stehen in Welt und Wirklichkeit 根本的ではない。実に、世界及び現実の中で生長すること、そして常に新らしく立場を取る必然性、及び互いに離れて坐する必然性の性格と課題を伴つて、入り措定されてあること、及び入り措定されることが das Hineingestelltsein und Hineingestelltwerden mit dem Charakter und der Aufgabe des Hineinwachsens in Welt und Wirklichkeit und des immer neu Stellung-Nehmen und sich Auseinander-Setzen-Müssens 根本的であるのだ。ドウレックスラーはいう。「人間存在の發展法則は、包括されること、及び抵抗性の相関性の中に依然として束縛されており、而も教育の技術は、ただそのように純正な生成と生動的生長とが活動され得るが故に、包括されることの世界の中への、抵抗性の要素の熟慮され且理性的な構築のうちに横たわる。」^⑧

以上の論述から、教育学的現実においては、ただ単に抵抗性の意味における現実と關係せねばならないこともなく、尚又、包括されることの意味における現実と關係せねばならないということもな

く、実に、両者の存在領域、及び現実領域が同時に、重要であるということ、そしてこれら両者はとき離し、難き相互的制約の中に存立していることが理解できる。換言すれば、教育学的領域にあっては、常に教育学的生起は、その中で演じ且実施される、ある中間領域の真只中にある。抵抗性と包括されることの根源的中間領域が *das Grundwissenfeld von Widerständigkeit und Umgriffensein* であり、その性格は抵抗性の相関性であり、又包括されていること、或は包括性の相関性である。

二

現実、実行すること、活動可能性の能動的たることとして理解できる。

我々は、現実の問題を、抵抗性と包括性の緊張中心の中へ入り措定されることの問題として、及び一切の現実の相互関係の制約性として考察を進めて来た。ところで、現実を現実そのものの中で表現される実行すること、及び活動可能性の能動的要素を顧慮して省察することによって、我々はより広いそして又明確なる現実の映像を、浮彫にすることが出来る。何故か。現実は、就中形成活動の中で活動する力が、及び創造的形成力が明らかとなり、且明示される領域 *der Bereich, wo im gestalteten Werke die Kraft des Wirkens und die schöpferische Gestaltungskraft sichtbar und manifest wird* であるからである。

1、思うに、現実、生成的現実として不断に変化し、且新らしく現象する現実として活動性の中に現象する。即ち、我々は、常に新らしく生

成するものとしての現実において、我々を悩まし且我々に殺到する現実の中に、及び不断に新らしい現実契機、新らしい現実関連を苦勞して作りだすことの中に、並びに新らしい現実欲求の支配の中に入り措定されている。活動性において、人間は生成することと活動することの究極的弁証法の中に *in einer letzte Dialektik des Werdens und des Wirkens* 存立する。ところが、活動性は、活動することと作りあげることとを *Wirken und Auswirken* 同時に意味するからである。つまり、活動性において、人間はただ現実の中に佇むというのではなくて、そこにおいて、絶えず自己自身、及び彼のその都度の現実を越えて出て行くのである。事実、我々の経験は活動性において、人が新らしく生じ来る現実の中へ入り自ら計画し、而して不断の活動と反作用の中に佇むということを知っている。活動性において、我々は絶えず現実を我々の背後に残し、且常に新らしい現実を我々の面前に招入れるのである。

2、我々は活動性において、同時に又不断に新らしい実現である、ある経過の中に入り措定されている。換言すれば、生成の弁証法が、人間を存在と無存在の緊張領域の中へ *in das Spannungsfeld von Sein und Nichtsein* 措定する。ここでは、常に新らしい生成が、より一層新たな努力、課題、そして要求の中で実現される。

現実の生成において、人間は常に新らしく、彼の人間存在における彼自身となる。それ故、生成の弁証法は同時に又、教育学的弁証法の中心の中心として現象する。というのは、新らしい現実が、それ自体から活動性と行動の中へ出て行くことにおいて、人間は同時に又再び

不断に新しい現実の中へ入り措定され、且それ故一層新らしく彼
の人間存在の中で、及び彼の特殊存在の中で、自己を認識するに至る
からである。

3、生成の弁証法は、教育学的に見て、時間の弁証法 *eine Dialektik der Zeit* となる。蓋し、時間は通路であり、そして永続的経過であり、同時に而も、時間は不断の措定と継続的切断によって特長づけられている。従って、人間は時間の中に束縛されており、且同時に自由であるということが出来る。時間の中で、人間は彼自身と一緒に成り、且彼自身を超えて生長する。このようにして、時間はただに生成と生長を条件づけるのみならず、同時に又ある現実の中へ、そして世界及び現実一般の中へ、より一層新らしく且より深く入り生長することを条件づける。然し、この入り生長することにおいて、原則的弁証法的に、人間存在も、現実存在も、他日完全に汲み尽くされ得ない、且最終的に規定可能ではない、そういった時間規定的過程の中へ入り措定される。ここで、より一層根本的なことは「人間と世界の、そして人間と現実の解き難き通信から、先ず本来的な教育学的問題が生ずる。…aus der unlöslichen Korrespondenz von Mensch und Welt und von Mensch und Wirklichkeit erst das eigentliche pädagogische Problem aufspringt,」^⑨ ということである。何故かという、先ず現実の中へ入り生長することにおいて、人は自己自身へ導かれ、且生動的意味において生長し得るという事実と、入り生長すること、そしてそれと共に同時に自己化のこの過程は、それにも拘らず決して終結し得ない、且最終的に将来解決され得ない経過であり、然し常に新しい

立場を、及びそれと共に又常に新しい公開性と内面的用意を渴望するという事実とが考えられるからである。

時間の弁証法の中で、我々は究極的包括的弁証法の中へ入り收納される。歴史性の弁証法 *die Dialektik der Geschichtlichkeit* がこれである。蓋し、人間の歴史性は、間断なき、断絶し得ない、そして不断に新らしく自己自身から生ずる活動存在、及び活動存在必然の性格を伴う活動の中で——抵抗性と包括存在から——啓示される。而も、この歴史性の中で、人はただ連続的に新しい現実を創造するだけではなく、同時に又現実によって再び影響され、且常に新らしく規定される。「歴史性は教育学的なるものから見て、不断に変化する現実の——この現実の中で、人は常に新らしく反省され、且反省しつつ、ただに自己自身を再発見するだけではなく、同時に又常に新らしく自己自身を超えて出て行くことを命ぜられ、且自己自身から構成される——世界における存在学習と抵抗必然の必然性を意味する」^⑩ とはドウレックスラーの言葉である。

4、活動性としての現実、自我概念に結合されている。何故か。人は彼の自我及び自我存在の中でのみ、不断に新しい現実に対立するからである。思うに、生成の時間性の経過にあって、自我こそ人間生成及び完全なる人間存在の法則が、それへと結合されている点であろう。単なる流れである生成の流れが、自我の中で存立へともたらされ、同時に而も自我によって、及び自我を通して常に新しい生成が誘導され、且喚起されるのが常である。

「自我は反省の中で、即ち再帰性及び帰り関係されることの中で、自

我致思そして自己意識の中で可能であるに過ぎない。Ein Selbst ist nur möglich in Reflexion, d. h. in Rückbezüglichkeit und Rückbezogenheit, in Selbstbestimmung und Selbstbewusstsein.」^⑪とこうドウレックスラーの言葉は注目に値する。思うに、反省の中で、人は所謂自己自身を思考する。つまり、反省の中で人間は又所謂彼自身ではない一切の他の現実から際立ち、或はすべての他の現実存在に対する彼の固有な現実の中で顕著となり、そして把握される。従って、自我の中に、人間存在そのものの現実と、一切の人間存在に結合され、すべての人間存在によって条件づけられ、一切の人間存在から再び際立ち、そして離れて行く現実との二重なるものが与えられていると考えられる。所詮、自我及び自我存在は、孤立の中で可能ではなく、ただ生動的通信の中で、即ち自己自身との、他の存在との、世界及び現実一般との交換、接触、出会い、そして調停の中でのみ可能である。

5、活動性の教育学的問題は、自己活動の問題の中で頂点に達する。というのは、自己活動の教育学的要求は、人間と現実との通信の根本法則に基づいているからである。固有な能動性乃至自発性は、ただ自己活動の中で、自己行為の中で、自分で擲もうとすることの中で、自己接触の中で点火される。人が不断の固有な努力の中で関係し、且彼の固有な意識領域の中に引き入れ、收容するそういった現実に対して、対象的意識が形成されることによって、純正な問題意識が自我探究において、自我発見の中に、自我吟味のうちに発展して行くものと考えられよう。

三

a、現実の弁証法は、人間存在の生成
弁証法であり、実現が主題となる。

以上の論述によって、現実の弁証法が、人間存在の弁証法へと導くことを理解した。現実結合性及び現実依存性から、人間存在の中心の問題となる。さて、活動性にあつて、人は抵抗性及び包括性の中心の中へ入り指定されている。然し、完全なる人間存在にあつては、常に新らしく実行される活動及び過程としての活動性が、実現へともたらされることを必要とする。蓋し、実現の中で、人は彼を取囲み且包括する中心の中へ入り收納される。而もここで、中心及び現実の中へ入り收納されることは、同時に又人間存在それ自体の永遠なる弁証法を意味するということ忘れてはいけない。何故か。ドウレックスラーもいう如く、「世界及び現実を常に新らしく自己自身から構成することによって、実現される存在こそ人間である。…der Mensch ist das Wesen, das sich verwirklicht, indem es Welt und Wirklichkeit immer neu aus sich herstellt.」^⑫からである。

一般に、実現には凡そ二通りの意味が考えられる。その一は、存在実現 *Seinsverwirklichung* としての実現であり、人間がそれ自身の中で運載し、且人間がそれ自身の中へと入り收納される活動性の映像の実現される場合がそれである。そしてその二は、ある現実の形態附与 *Gestaltgebung einer Wirklichkeit* としての実現であり、活動性の問題にあつて、重点が生成問題の上に、つまり生成の弁証法の上におかれる時、必然的に問題となる事態である。そして、尚一層省察を進める

ならば、実現は存在及び生成の永遠なる弁証法によって特長づけられ、且人間存在における人間自体の、この取消し難き弁証法的過程の中へ入り收納されていることによって特長づけられるということに気付く。而も、実現は実行力を *die Kraft der Durchführung* 前提する。そして、この力は押つけ的抵抗性に対する擁護の力として、つまり抵抗力として *als Kraft der Behauptung gegen die andrängende Widerständigkeit, als Widerstandskraft* 或はそれとも内面的な強さ、被包括性、把握されることの力として、即ち形成力として *als Kraft der inneren Stärke, der Ungriffenheit, des Ergriffen-und Gepacktsseins, als Gestaltungskraft* 現象する。而して、実現の最大の力点は、包括されること、及び内面的に浸透されることの強さから生ずる——この強さは、ただに運載するのみならず、尚且充足し、又それ自身によって規定する、ある現実の中へ完全に入り收納される強さに対応する——ということが留意されるべきである。

実現にあっては、人はある中心の中へ入り收納されている。然し既に論じた如く、完全なる人間たることとしての人間存在は *Menschsein als volles Menschentum* 決して与えられていないのではなくて、常に提出されており、依然として人間存在と世界存在との決して取消し得ない緊張関係からの、絶えざる弁証法的課題である。従って、ここでいう中心は、弁証法的中心 *dialektische Mitte* を意味し、そして浮動的中心 *eine schwebende Mitte* として特長づけられる。思うに、ある現実の中心の中へ入り措定されることは、常に新しい関係を意味する。中心は常に再び見失われ、且常に再び求められねばならな

い。中心の弁証法は、ただに人間が常に中心から脱落するという、自己自身を見失うという、そして又彼の本質的本来的存在の中で自己を放棄するという危険の中にあるというだけではなく、尚又現実が、つまり形成され且形成化された現実が、分裂するという、そして内面的凝集力を見失うという脅威に、絶えずさらされているということの中にある。この場合大切なことは、人間が現実の精神的関連を保護しようと思志し、且又現実の実際的凝集力を保持し、保証しようと思志する時、それと共に人間そのものが不断に新しい弁証法的中心の創造の必然性の中へ、おきかえられるということである。

b、人間存在の弁証法は、世界存在の

問題において点火される。

人間存在の弁証法は、世界存在の問題において点火される。蓋し、人間存在の中心は、世界存在、及び人間存在の根源的相互関係の中に包含されている。その所以は以下の如く思考されよう。

1、人間は、彼の人間存在の中心を、自己自身、及び彼の固有な自我存在から獲得するのではなくて、その中心は、世界の中心——これを人は創りだし、この中へ入り收納されており、且ここから人は生き、そして活動する——によって、基礎づけられ且措定される。而も、人間は世界に依属し、且世界は人間に依属する。この関係の中にこそ、人間と世界の結合性と相互的浸透性の契機が *das Moment der Verbundenheit und der wechselseitigen Durchdrungenheit* 横たわる。「依属性の中に、通信の深みが横たわる。In der Zugehörigkeit

liegt die Tiefe der Korrespondenz.」とドワレックスラーはいう。その場合更に、この通信から、常に創造的表現における新しい現実の出現するということが記憶されるべきである。

2、既に、人間存在の中心が、常に弁証法的中心であることは指摘した。というのは、人は他の世界存在の中で、不断に又他の現実存在の前に佇むからである。換言すれば、他の人間存在或は世界存在を承認する、乃至否認することなくして、固有な人間存在は存し得ない。

人は、この弁証法的中心の中で、すべての他の人間存在、及び世界存在との生動的関係の中にあり、一切の他の人間存在、及び世界存在によって制約されていることを自覚し、同時に又そういった存在に関与すべき必然性を認識し、更にはその存在に従事する必然性を認識し、且彼の本来的形成及びより広大なる発展へと促進される必然性を認識する必要がある。

ところで、人間的なるもの中心は、人格的なるもの *das Personliche* である。そして、この人格的存在の中に、人間存在と世界存在の生動的交点が存すると考えられる。何故か。所謂人格的なるものは、人間存在と世界存在との生動的関係の表現であり、この生動的関係の中で、我々は世界及び現実を、同様に人間及び人間存在を堅持し得るからである。

3、而して、人格的存在は人間学的なるものから見ると、公開存在へ及び内面的存在へ *zum Offensein und zum Innerlichsein* 拡張され且深化される。自我存在は何といっても、その深みを人格的存在の

中に有する。人格的存在の中で、自我存在の偏狭さが徹底的に破壊され、且広いそして安全な関係の中へ入り措定される。というのは、自我存在は公開存在の中で、他の現実及び現実一般との結合を開始するからである。思うに、公開存在から、一切の未来指示的要素が生長し、且公開存在から、丁度人が来るものを先取し得、現在及び瞬間的場へ関係し得、更にそういった場の関係の中へ入り得る如く、そのように人は未来の中へ入り立案するのである。

4、ところで、人格的存在及び公開存在は、それらの本質根源を、内面的存在の中に有する。何故かという、内なるもの、及び内面的なるものが欠けているところでは、何ものも人間存在の内面の中へ浸透し得ないし、又感受能力としての公開存在は、必然的にある内面的存在を前提するからである。

従って、自我存在は人格的存在、及び公開存在に結合されていると同じく、内面的存在に結合されている。というのは、内面的存在において、自我存在はただ単に関係点及び反省点であるばかりでなく、そこから常に新しい生、及び精神的運動が生産されるといった緊張中心と化するからである。ここでより一層重要なことは、内面的存在において喚起される弁証法的緊張は、人間を単なる私の関係から *aus blossen Ichbezug heraus* 解放し、そして人間をより大きな現実、つまり彼を包括しそして彼に浸透する現実、に、附属させるということである。

四

教育学的実行は、教育学的現実にお

ける人間存在の実現であり、それは

相關的弁証法に依拠する。

さて、人間存在の実現は、何といつても教育学的現実における教育的実行に結びつけられている。そして、一切の教育学的現実の中で実行される人間存在の自我実現は、教育学的誘導と指導を前提する。

蓋し、教育は人間存在の実現における援助であろう。然し、この援助は決して一義的な援助ではなくて、常に多方的或は又多面的な援助である。

人間はその人間存在にあつて、ある中心の中へ——人はこの中心から転り出るべく余儀なくされ、且人はこの中心を見失うべく余儀なくされる——還帰されねばならない。ところで、ある中心の中へ指定することは、人間を少なくとも二つの側面から包括することを意味し、且一定の把握の中に獲得することを示す。押し動かして正しい位置におくことは *das "Zurecht"-rücken* ただに常に新らしく調整されねばならず、且視野の中へもたらされねばならない方向を与えるばかりでなく、尚又人間を二側面乃至可能性——これら両者は、人間の存在に就いて構成的であり、人はこれらに關係し、そして両者の間で自己を保持し、且依然として浮動の中に留まらねばならない——の間の中心へ指定する。ところで、この論旨の始めに、我々は抵抗的現実と包括的現実の対立を構成した。ここで再度、この対立を相關的構成的根源意識の中に作りだした、我々の省察の出発点へ還帰せねばならない。既

に説明してきた如く、人間は世界及び現実の中へ入り指定されることにおいて、常に抵抗的現実と包括的現実との緊張中心の中に存立する。而して、この根源相關關係から *aus dieser Grundkorrelation* 教育的視点に於て相關的弁証法として特長づけられ得る弁証法が誕生する。その所以は以下の如くである。

1、既に我々は、人間存在の構成的要素として、人格的存在、公開存在並びに内面的存在 *das Persönlichsein, das Offensein und das Innerlichsein* の三存在を明らかにした。思うに、それらにおいて、そしてそれらの表現から、相關的規定的弁証法の本質が *das Wesen einer korrelativ bestimmten Dialektik* 最も力強く示されるであろう。

先ず、人間存在の実現の教育学的実行において、我々は人格的なるものを、純粹にそのようなものとして把握するというのではなくて、常にただそれの対立から、即ち非人格的なるもの、無人格的なるものとの明らかな対立の中で把握せざるを得ない。思うに、人格的なるものは、近親、温かさ、誠意、直接法の契機を有し、主観的なるものであり、人格的に意欲されたもの・努力して獲得されたものを中核とする。これに反して、無人格的なるものは、隔離、冷酷さ、純粹な間接性及び対象性を特長とし、客観的なるものであり、客観的に要請されたもの・必然的なものと考えられる。かく観てくると、客観的無人格的なるものは、人格的に充足されたものの反対の極と化する。この正・反—対立の緊張中心の中へ入り收納されることによつて、我々は同時に教育学的実行において、取消し難き且常に新らしく将来実行される

教育学的弁証法の中へ入り措定されるのである。しかし、それは如何なる理由によってであろうか。

人間は、人格的なるものの中で、駆立てられること、内面的に充足されること、並びに浸透されることの側面に auf der Seite des Getriebenseins, des inneren Erfülltheits und Durchdringenseins 立ち、無人格的なるものの中で、不断に新しい要求と要請の側面に auf der Seite stetig neuer Forderung und Anforderung 立つことが考えられる。事実、充足された人格的存在、及び人格存在の可能、並びに自我存在可能は、他の現実の中へ入り設計され、そして自己自身から出て行くことにおいて、自己自身によってこの現実を整頓し規定する。又客観性の純粋な即物性は、我々に退去を命ずることが可能であり、我々を我々自身の中へ還付することができる。換言すれば、人格的なるものの中に、固有な映像及び固有な意欲からの自我形成及び自我実現が die Selbstgestaltung und Selbstverwirklichung aus eigenem Bild und eigenem Willen heraus 横たわり、無人格的なるものの中に、実現の冷酷さ及び義務充足の無条件性と峻厳さが die Härte der Verwirklichung und die Unbedingtheit und Unerbittlichkeit der Pflichterfüllung 存する。従つて、人格的なるものと無人格的なるものとの緊張対立の中で実行される究極的弁証法は、人格的に充足された固有規定的世界と、我々を脅かし、我々を我々自身から取りあげる他なる世界及び現実との対立の中に横たわり、そして根源的に、その弁証法の中で、我々がすべての現実において、その中へと入り措定される包括されることと、抵抗性との根源緊張を露わにする。

2、先立つ論述において、公開存在からある道程が、ある精神的進展が、並びに又ある人間的生成と生長の生ずることを説明した。然し、生成と生長は、ただ公開存在において、及び公開存在からのみ実現され得ない。何故であろうか。公開存在は対目的にただ押し流される、或は自己を見失う危険の中へ入り、そして生長と生成の過程と不可欠に結びつき、且結びつかねばならない全ての安定化を不可能たらしめるからである。かくて、公開存在は必然的に、結合存在、及び入り結合されていることの弁証法的規定の相関対立を den dialektisch bestimmten Korrelationsgegensatz des Gebundenseins und Eingebundenseins 要求する。蓋し、公開存在は自由たること、解放されていること、無依存的たることの原理に auf dem Prinzip des Freiseins, des Gelöstseins, des Unabhängigseins 依拠し、結合存在は、内面的に関与し、そして順序よく整頓し、且所与の限界及び前提の中で従属しそして後程に整え直される、そういった秩序原理を ein Ordnungsprinzip, das einbezieht und einordnet und — in den gegebenen Grenzen und Voraussetzungen — auch unterordnet und sich nachordnet 予想する。この限りにおいて、公開存在はただ結合されること、入り結合されることの中で、実り豊かに全力を尽くし、そして方向附与的に、自己自身を超えて出て行けと命じ得る。従つて正しく、相関的規定的弁証法の法則が、公開存在と結合存在とを順次重なり合った関係の中に措定し、そしてそれらにある弁証法的関係の中へもたらすのである。

3、相関的弁証法は、緊張中心の法則 das Gesetz der Spannungsmitte によって特長つけられる。蓋し、この緊張中心から、弁証法的

出発と弁証法的運動とが実現される。この場合とりわけ重要な事柄は、純粹に相關的な点において、我々は緊張領域と関係せねばならぬということである。生成の弁証法にあって、緊張領域の相關性が、弁証法的緊張中心の力学となり、且この緊張中心から始めて、教育的過程及び教育学の實行が生ずる。

緊張中心は、最も深い意味において、存在中心 *eine Seinsmitte* であろう。而して、内面性及び内面的存在の中に、我々は同時に又存在中心の性格を有する、究極的弁証法的緊張中心に直面する。内面的存在において、緊張中心はそれが同時に、中心それ自体の弁証法と結合されるといふことなくしては存在し得ない、深さの弁証法 *eine Dialektik der Tiefe* へと凝縮される。思うに、中心の弁証法と深さの弁証法は相互に制約し合う。何故かという、中心は深さの力から由來する時、その場合のみ真の中心であるからであり、中心はその場合逃げ失せるということもなく、且存立、統一、又継続を有するからである。他方又、深さは、それが中心へ、それと共に人格的存在及び公開存在の中心へ関係されている時、その場合のみ、建設的形成諸力の生長する真の深さと化するからである。

五 結 び

人間存在の問題は、一切の現実それ自体の相關性の法則の問題なくしては把握され得ないが故に、この弁証法は相關的規定的弁証法である。

1、教育学的なるものは、相關的弁証法の法則によって規定される。この弁証法にあっては、人間は同時に弁証法的に自己を超えて出て行けと命じ、且更に広く活動する相關性の中へ入り措定されている。

2、教育学的の現實は、弁証法的相關的根本性格を有する現實を意味する。つまり、教育学的なるものにおいて、及び教育学の實行において、我々は常にある交点——この交点の中で、教育学的により広なる前進が、現実それ自体の相關性の中におかれては緊張関係から由來する——の中に存立する。

3、教育科学の對象は、存在性格及び実行性格を同時に所有する。この對象の中に、人間存在の中心だけではなく、尚且現実一般の中心が包括されている。即ち、この中心は、存在中心それ自体として正しく純粹な存在性格を、つまり最終的に付与された性格をではなく、弁証法的な、より一層新らしく提出され、且將來實現される性格を有する。この故に、教育科学の對象規定の中には、人間存在自体の實現の弁証法と同様、人間存在における活動性の弁証法が顯著に存在する。

あとがき

教育問題及び又陶冶問題は、現實問題において点火される。現實との出会いそして和解の中に教育学的の生起が實現する。つまり、

イ、相關的規定的弁証法の根本法則性において、一切の人間の行動及び行為が、現實關連的なるもの、及び現實規定的なるものとして証示され、且現實も亦形成的形式的に人間へ還り作用する。

ロ、現実への配列の中に、同時にその反作用の法則が横たわり、現実に向けること及び現実関連の形式の中に、同時に又教育学的発端と教育学的作用の可能性が基礎づけられて横たわる。

如上の問題は、より詳しく、教育方法論として論ぜられるべきであつて、本論の論旨の一層の徹底と明確さとに役立つことであらう。筆者はこの問題に関しても、ドウレックスラーの卓越した意見を通して、若干の資料を持ち合せている——例えば、労作と方法と形成の問題構成がそれである。然しながら、本論自体がいわば未熟な一試論にすぎず、ドウレックスラーの所謂 *fertige, einen geschlossenen Probenkreis umfassende Abhandlung* にはほど遠いことを熟知しているが故に、先走った論考は今差控えたい。

(一九六三、一、十、)

(この論文は、昭和三十七年十一月二十三日、中・四国教育学会——第十四回大会——で口頭発表したものを訂正増補して纏めたものである。

尚、この研究に際して、岡山県並びに本学後援会の研究費に負うところ大であり、ここに記して深く両当局に謝意を申しあげたいと思う。)

(Literature)

- ①, Julius Drechsler: Das Wirklichkeitsproblem in der Erziehungswissenschaft, 1959, S. 81.
- ②, *ibid.*, S. 11.
- ③, *ibid.*, S. 6.

④, *ibid.*, S. 7.

Vgl. dazu die Untersuchungen von M. J. Langefeld in seinen „Studien zur Anthropologie des Kindes“, Tübingen 1956, und „Kind und Jugendlicher in Anthropologischer Sicht“.

⑤, J. Drechsler, *ibid.*, S. 12.

⑥, *ibid.*, S. 14.

⑦, Peter Petersen: Der Ursprung der Pädagogik, Berlin, 1931 S. 2 u. 4.

⑧, J. Drechsler, *ibid.*, S. 19.

⑨, *ibid.*, S. 47.

⑩, *ibid.*, S. 48.

⑪, *ibid.*, S. 49.

⑫, *ibid.*, S. 52.

⑬, *ibid.*, S. 56.

Summary

A study on the pedagogical thinking.

—from the standpoint of a German educational science—

The dialectic logic is most important in the pedagogical thinking. And, I think, alike J. Drechsler, a structure of the pedagogical category is to be prescribed by the correlative dialectics. If it is so, how the correlative dialectics should be constructed? In the fields of education, what functions can this logic fulfil? Generally speaking, the relation of human being to the actuality is that of the strain-dialectics conditioned constantly and correlatively. In fact, a human being in the pedagogical actuality, is conditioned by J. Drechsler's "korrelativ bestimmte Grundstruktur und dialektisch ausgerichteteter Grundcharakter". This will be clarified through investigating the following three points.

1, Because the problem on a human being cannot be grasped except for the problem of correlative law of all actuality itself, the dialectics is correlative and prescribed dialectics.

2, In this dialectics man at once gives orders to set out dialectically over himself, and is prescribed in the correlation which is still more widely acting.

3, Therefore, in performing pedagogically, man is always in the intersecting point, in which the pedagogically wider progresses are made from the strain-relations that have been laid in the correlation of actuality itself.
